よみがえった震災地―玄界島―

池　田　　碩*

The Rebirth of an Earthquake Devastated Village
on Genkai Island in Kyushu, Japan

Hiroshi Ikeda*

要　旨

2005年３月20日「福岡県西方沖地震M7.0が発生し、博多湾沖の玄界島が襲われた。214戸・人口700人の小さな漁業中心の島の107戸が全壊・46戸が半壊で、被害のなかった家はないという大変な状況であった。

その後どのように復旧させるかを島民と行政側の福岡市とで話し合いを続けた。その結果、島の集落を全て解体して新しく整地・造成し直し、安全でしかも生活に便利な島へと３年を目標に再生させることに決めた。その後は島民と行政側とが一体となって必死で対応した。そうして３年が経過した。その結果、斜面を這い上がり、狭い道路と石垣の多い不便な島から、都市の郊外住宅並の生活ができる島へと生まれ変わった。この経過と経験は、自然災害の多いわが国での復興のモデルとして、今後活かされるであろうことを期待し報告する。

【キーワード】福岡県・西方沖地震　玄界島　集落の解体そして再生　復興のモデル

1. はじめに

2005（平成17）年３月20日午前10時53分「福岡県西方沖地震」が発生した。震源は予側外の地域で、深さ９㎞、M＝7.0、震度６～７と推定（震度計未設置のため）の海底であった。この付近では南西側の九州本島で1898（明治31）年８月10日にM＝6.0の糸島地震が発生しているくらいである。被害の大きかった「玄界島」は福岡市西区に所属し、港の北方沖合20㎞に位置。面積は1.14㎢の小さな島で、人口は昭和30～60年頃までは1,000人を推移していたが、その後は急に減じ現在は232世帯で700人と化していた。

島の北側は玄海灘・日本海に臨み暴浪に洗われるため、急崖が続き集落は無い。それに対し、島の南側は博多湾に臨み波も比較的穏やかである。気候的にも温暖であるため、平地は無いが緩斜面に沿って民家が海岸から這い上がるようにびっしりと密集している。石垣の多い集落地の道路は急坂で狭く、自動車の走れない不便な島であった。島内にはお寺も無く観音堂のみで、主要行事は神社を中心に行なわれていた。小学校・中学校が各１、高校は無い。このように厳しい生活環

2008年９月18日受理　*地理学科教授　*Dept of Geography

境であるため、近年は特に若者を中心に島を離れる者が多く、典型的な過疎で高齢化の進んだ島となっていた。

この島を地震が襲ったのである。その結果、家屋の半数が全壊で被害を受けなかった家屋は無いという甚大な被災状況であった。昼間の発生であったのが幸いしたためか死者の出なかったのが信じられないほどのすさまじい有様で、ただちに福岡市役所内に災害対策本部を開設、島では漁協の玄界島支所に現地本部を設置。当日中に、全島民を船で福岡市中央区の九電記念体育館へと全島避難させた。

表ー1. 住宅被害　　（　）は、共同住宅の棟数で内数・福岡市

被害区分（棟）	全　市	東　区	博多区	中央区	南　区	城南区	早良区	西　区 玄界島を除く	**玄界島**
全壊	141 (0)	6 (0)	9 (0)	9 (0)	1 (0)	0 (0)	2 (0)	7 (0)	107 (0)
大規模半壊	8 (0)	4 (0)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	1 (0)
半壊	315 (13)	52 (1)	42 (0)	66 (8)	5 (2)	0 (0)	27 (2)	78 (0)	45 (0)
一部損壊	4,756 (151)	1,315 (29)	334 (12)	494 (70)	69 (16)	176 (0)	462 (13)	1,845 (11)	61 (0)
計	5,220 (164)	1,377 (30)	386 (12)	570 (78)	75 (18)	176 (0)	491 (15)	1,931 (11)	214 (0)

あれから３年半が経過した。被害が激甚であり、その後の対応について話し合いを重ねた末にやっと斜面に位置する全集落を取り除き、すべての土地を新しく造成･整地し直して、安全で生活にも便利な集落へ作り変えることに決定した。その後は島民と行政側とが一体となって、正に必死の葛藤と粘り強い戦いが続いた。そして集落が、島がよみがえった。筆者も被災直後から毎年現地を調査のため訪問してきた。そこでとりあえず本論では被災時の状況と復興経過の地理学的側面を中心にメモリアルとしてまとめておくことにした。

2. 集落の解体と復興事業

全島民の島外避難は無事終えたが、余震への心配があること、さらには離島であり日常の生活物資の多くを移入している状況を考えると、しばらくは帰島の予定は立てられないままの生活を覚悟せねばならない。福岡市では当分の間の生活に対する救援と、体育館ではなく生活の場の確保のため、ただちに仮設住宅の建築を進めることにする。

若干落ちつき出すにつれ、当然ながら今後島をどう復興させるのか、その中で各家はどう対応するかを考えねばならなくなる。

そこで皆が集まって考える会を組織することになり「復興対策検討委員会」が立ち上げられた。第１回の会合が５月７日に開催され、さらに第１回の島民総会が５月21日に開かれた。その中で島民がまとまり一丸となって復興に取り組むこと、被害の大きい集落密集地域である斜面部分は、一体的に整備したいと行政側に要望することで意見がまとめられ、この「ピンチをチャンスに」を合言葉にして頑張ることにした。福岡市の災害対策本部では、さらに玄界島復興担当部を置き、

12名ほどの専門家でプロジェクトチームを組み対応していくことにした。

とりあえずは阪神･淡路大震災の復興事業の事例から学ぼうと、６月15･16日に被災後立派に復興させた各地を視察した。そのうち松本地区の中島会長さんから、やはり復興に当たって一番大切なことは「地域住民の心が１つになることです」と云われたことが特に印象に残ったという。

その後行政側で復興に向けての事業手法として複数案を検討、そのうちから国の補助金を含むこの地の復興にとって効率の良い「小規模住宅地区改良事業」として進めることを提示、７月17日の第２回目の島民総会で説明され合意を得た。

表－２．小規模住宅地区改良事業の概要（小規模住宅地区等改良事業制度要綱）

〈目的〉

不良住宅が集合すること等により生活環境の整備が遅れている地区において、住環境の改善を図るため、健康で文化的な生活を営むに足りる住宅の建設、建築物の敷地の整備等を行い、もって公共の福祉に寄与する。

〈補助対象〉	補助率
・不良住宅の買収・除却	１／２（跡地非公共の場合１／３）
・小規模改良住宅建設用地の取得造成等	１／２
・小規模改良住宅整備	２／３
・用地取得	１／２
・公共施設・地区施設整備	１／２
・津波避難施設等整備	１／２

〈根拠規定〉

・小規模住宅地区等改良事業制度要綱（平成９年住宅局長通達）
・住宅地区改良事業等補助金交付要領（国土交通省住宅局長通知）
・平成18年度における住宅局所管事業に係る標準建設費等について（国土交通事務次官通知）
・改良住宅等管理要領（国土交通省住宅局長通知）

その後は、３年間で復興事業を完了させることを目標に、まずは島民の土地･建物の買収が行なわれ、急速に家屋の解体と造成工事が進められることになった。

３．復興事業の展開

島の集落を解体し造成し直し、新たな島づくり･まちづくりを進めるに当たってまず重要なことは、島自体の地盤地形が安全なのかの確認である。

震災発生後、種々専門分野の研究者や学会規模での調査が進められた。標高218mの玄界島の基盤は花崗岩であり、山頂部には玄武岩がキャップロック状に載っている。地盤工学会からは集落地域の斜面を中心に調査を行った結果、大きな地滑りは発生しないとの判定が出、ほっとした。

つぎに島民たちの精神的な支えとなってきた小鷹神社･若宮神社や観音堂の再建と修復を行なうことを決定する。17年の10月からはまちづくり案や復興プランの策定に向けての意見とそれらの取りまとめが進められていく。それぞれを行政側に持ち寄り検討して詰めを急ぎ、より満足でき

る案へと何度も修正していった。やっと18年１月25日の第５回総会で、まちづくり案が決定、さらに復興作業のスケジュール案も報告された。

７月からは、いよいよ旧集落全体の解体作業が開始され、10月末には完了の予定で進む。10月には造成と整地作業も同時に進み出す。その後の経過を戸建住宅の場合を中心に記すと、19年６月には宅地の配置が確定。７月には造成工事が完了する。11月からは戸建住宅の建築が始まる。

筆者が訪問した19年10月５日頃は、「地鎮祭」のハシゴで、慶事を務められていた神主さんが大変な状況であった。小鷹神社・若宮神社の修築工事も完了する。

20年３月に入ると戸建住宅も一斉に建ち上がってき、新築住宅が並ぶ景観はまさに圧巻、島のよみがえりに接することができた。倒壊した納骨堂も新築され、３月25日までに全員帰島。３月末で復興事業所閉所、福岡市の復興部も廃部。担当してきた部員たちはそれぞれ新たな部署へと配置替えされていった。

３年間まさにフル回転、総事業費71億円をかけた全ての復興事業が完了した。

4. さいごに ―まとめにかえて―

全島民を島外避難させるという最悪の事態に直面したが、玄界島の所属する地方（じかた）が、福岡市の西区であったことはその後の対応に利した。ただちに福岡市では市長を本部長とする「災害復旧・復興本部」が設置された。当面の経済力もあり、有能な行政スタッフのチームが担当することになった。島民側では、自主的組織として「玄界島復興対策検討委員会」が発足した。その後は両者が綿密に話し合いを重ね、対応を検討してきた。

復興・帰島の目標を３年とし、「小規模住宅地区改良事業」方式で進めることに住民の総意で決定した。続いて、大規模地震の被災地で復興の経験のある阪神・淡路地方を訪問し、復興に向けてのモデルと進め方を学んだ。

そうして集落全体を解体した上で新しいまちづくり・島づくりに向けて島民が一丸となって「ピンチをチャンスへ」を合言葉に復興へスタートを切ることができた。その後の経過は前述したごとく展開された。その結果、目標通り３年間で大事業を完成させることができた。

以上の経過は、災害多発国であるわが国での被災発生地域におけるモデルとして、今後生かされるであろう。

結果的には、玄界島は生まれ変わり、よみがえった。集落の位置こそ変わってはいないが、集落の景観と生活環境は一変した。建物は都市郊外の新興住宅地並となり、生活面でも自家用車を利用できるようになり、その他あらゆる生活空間が快適になった。老人のための憩いのホームの設置やエレベーターを使用した高位置への道路対応も考えられた。

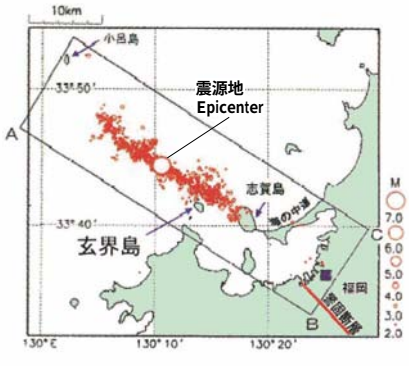
しかしながら、この島が高齢者の多い「老人の島」、さらには「過疎の島」であることに変わりはない。被災からはよみがえったが、これからの島の行方が注目される。筆者もこれまでと同様に時折この島を訪問させてもらい、追跡と考察を重ねたいと思っている。

写真Aページ　震災地玄界島の集落解体と復興過程　全・池田撮影
Photo, Page A　Genkai Island Immediately After the Earthquake (March 23, 2005)

①2005.4　②2007.3　③2007.10　④2008.9 ― The Newly Completed Village Today

写真Bページ　各地の復興状況－１－
Photo, Page B　Genkai Island After Reconstruction－１－

震央分布図



被災当時　福岡市提供

↕　　↕

上・下：同場所　池田撮影　　上・下：同場所　池田撮影

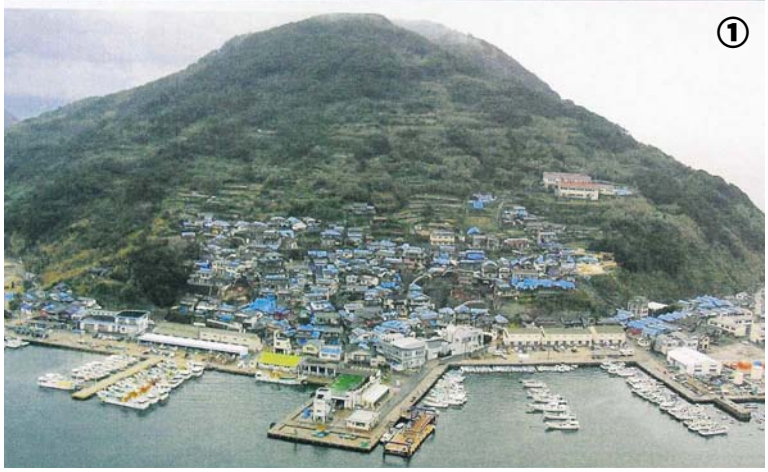
写真Cページ　各地の復興状況－２－
Photo, Page C　Genkai Island After Reconstruction －２－

↕　↕

上ー中ー下：同場所、都市郊外並みの住宅へ
写真Bページ　右上の部分全体
が解体され、造成された　池田撮影

上ー左側写真の部分に新築された
家屋には鯉のぼりと大漁旗がよみがえった
中ー海岸に仮設されていたが、
下ー新造された観音堂へ　池田撮影

写真Dページ　よみがえった玄界島
Photo, Page D　The Rebirth of an Earthquake Devastated Village on Genkai Island



①2005.3.23　福岡市提供　②2008.3.25　福岡市提供　③2008.9.13　池田撮影

注

１）福岡県立戸畑中央高等学校郷土部（1967）：『玄界島』137頁、離島調査第10部
２）福岡市教育委員会（1995）：「志賀島・玄界島遺跡発掘調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第391集
３）特別報道写真集（2005）：『福岡沖地震』西日本新聞社
４）福岡県西方沖を震源とする地震災害状況図（2005）：国土交通省国土地理院
５）大村寛・他（2005）：2005年３月20日福岡県西方沖地震による土砂災害に関する研究報告、砂防学会誌、Vol.58、No.2
６）平成17年度科学研究費（特別研究）　研究代表者・川瀬博（九州大学大学院人間環境学研究室）（2005）：『福岡県西方沖の地震の強震動と構造物被害の関係に関する調査研究』
７）玄界島復興だより　第１号2005.７.10－第16号2008.３.31：玄界島復興対策検討委員会
８）福岡市（2008）：『玄界島震災復興記念誌』都市整備局玄界島復興担当部

謝辞

震災発生直後から、福岡市の「玄界島復興担当部」須川哲治部長、現地では「玄界島復興対策検討委員会」伊藤和義会長、「玄界島漁業協同組合」林繁組合長等々に大変おせわになった。さらに島民のかたがたには現地案内や聞き取り調査に当って協力いただいたことを記し、謝意を表します。

The Rebirth of an Earthquake Devastated Village on Genkai Island in Kyushu, Japan

Hiroshi Ikeda

At 10:53A.M. on March 20, 2005, the "Fukuoka Prefecture Seiho-oki Earthquake" (M=5.8) struck the northern part of the island of Kyushu which is in southwestern Japan. A fishing village of population 700 on the island of Genkai, located offshore near Hakata Bay, sustained catastrophic damage. A total of 107 of its 214 houses were totally destroyed, and another 46 were severely damaged; not one building escaped some kind of major damage.

After that, the island's residents and government officials of Fukuoka City, within which the island is located, undertook discussions about the island's recovery and reconstruction. They agreed to a plan to remove all of the remaining buildings in the village and build a completely new settlement, one more resistant to natural disasters and more convenient and comfortable for the village's aging population, all within three years!

Three years have now passed. In this paper, the author presents the contents of the plan and process by which it was developed and decided upon. Color photographs of the settlement before, during and after construction are included to help clarify what happened in transforming a quiet fishing village, destroyed by an earthquake, into a modern suburban landscape. This could serve as a model for post-earthquake recovery in Japan, a country that has experienced numerous natural disasters and is likely to continue to do so in the future.